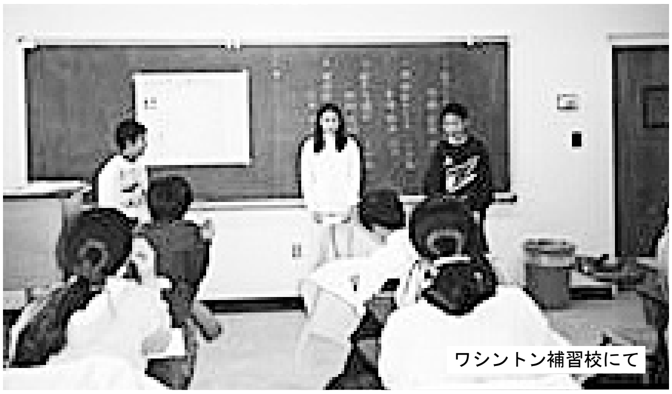
ありました。しかし、いつの間にか、帰国しないけれども補習校で学習する子どもたちが増え、この子たちの家庭にも補習校が支えられているのが現実です。先生たちは、日本語の力が十分でない子どもたちや、日本語を学ぶ必要性を感じていない子どもたちを目の前にして、悪戦苦闘しています。こうなれば、日本語の弱い子どもたちをどう教えるか、日本語がなくても困らない子どもたちに日本語の楽しさをどうやって感じさせるかを工夫しないわけにはいきません。

今はまだまだ試行錯誤の最中ですが、きっと新しい指導法や、システムがだんだんと考えだされてくるにちがいありません。「必要は発明の母」といいますし、日本人は、新しい状況に対応する力があることをいろいろな分野で証明してきたのですから。

帰国しない子どもたちの家庭には、両親が日本人の場合もあれば、親のどちらかあるいは両方が外国人の場合もあります。いずれにしても、子どもたちは、外国の社会の中にあって、その一員として生きていくことになります。もしも、彼らが補習校で充実した学習や生活ができたとしたら、彼らは、その国の人々の中で、日本の文化や言葉をよく理解して、日本のことを正しく伝えてくれるメンバーになるはずです。文化センターを建てても、日本紹介の行事をやっても、これほどの効果は期待すべくもありません。帰国しない補習校の生徒の存在は、日本の将来にとって、はかりしれない利益になる可能性があるのです。

◆日本人学校のこれから

変化の波にさらされているのは、補習校だけではありません。全日制の日本人学校も、曲がり角にきています。現地校を希望する生徒の割合が多くなり、日本人学校に来る子どもたちの数が減っているところが少なくないのです。その理由は、日本人の子どもたちを受け入れる現地校の態勢が整ってきたこと、帰国生の数が増え、帰国した時の不安が以前ほどではなくなってきたことなどが考えられます。今は、日本国内と同じような学校が海外にあるというだけでは、十分ではないのです。日本人学校に通っていても、外国に住まなければ学べないことを学び、その国でなければできないような体験ができることが求められるようになってきたのです。

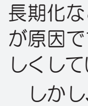

ワシントン補習校にて

日本人学校の恩恵を受ける子どもたちはけっして少なくありません。例えば、日本から来た子が現地校に通うとすれば、その国の言語で学習できるようになるまでは、教科の内容を理解することができず、「学習の空白」のような期間になってしまう恐れがあります。短期滞在の場合には、現地校での学習に関しては準備をするだけで、実際に成果を上げる前に帰国することになってしまうかもしれません。

日本人学校は、日本で学習してきた子どもたちにとってリスクが少ない選択と言えますが、その上に、外国に住む機会を生かした学習ができるようになれば理想的です。そうなれば、滞在が長期になる子や、外国人を親に持つ子にとっても、魅力的な学習の場になるでしょう。

補習校や日本人学校の今は、海外の子どもたちの境遇に似ています。自分で望んだ訳ではないのに、難しい環境に置かれて、そこから逃げることはできないという状況です。その困難を乗り越えた子どもたちが大学や企業からも高く評価される力を身につけ、期待される人材になっているように、補習校や日本人学校が、今の困難な課題に立ち向かうことで新しい力をつけて、さらに魅力的な教育機関になることを期待したいと思います。新しい可能性をふまえて、補習校や日本人学校を応援するにはどうしたらよいかを真剣に考えなければならないときが来ています。

啓明学園　初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ : www.keimei.ac.jp
E メール : kokusai_info@keimei.ac.jp


北米には補習校が 90 近くあります。バブル経済の時代に海外駐在を促すために、これらの学校が続々と作られました。そこでは帰国後の日本での教育に遅れないための指導が中心でした。

しかし、バブル崩壊後、その役割は大きく変化してきました。滞在の長期化など北米滞在家庭の変化に伴う、補習校での教育ニーズの多様化が原因です。その多様性の幅の広さが、今日の補習校の教育・運営を難しくしています。

しかし、その大変さに負け、補習校での教育を放棄するわけにはいきません。佐々先生同様、私も 30 年近く海外の子ども達と過ごしてきました。この記事で紹介されている先生の教え子さんのように、「逃げることの出来ない」海外での厳しい環境の中で学び習得した「宝 」を生かして、たくましく生きている若者を多く見てきたからです。

佐々先生も同じだと思いますが、その若者達への想いが、本誌の発行への私のパワーとなっています。教え子達に感謝！